2022 年度 個人研究実績・成果報告書

2023 年　4 月　19 日

所属	基盤教育機構	職名	准教授	氏 名	枡岡　大輔
研究課題	遠藤隆吉「生々主義哲学」研究				
研究キーワード	生々主義　哲学　実学		当年度計画に対する達成度	3.概ね順調に研究が進展し、一定の成果を達成したが、一部に遅れ等が発生した	
関連する SDGs項目	4. 質の高い教育をみんなに	10. 人や国の不平等をなくそう	16. 平和と公正をすべての人に	17. パートナーシップで目標を達成しよう	

１．研究成果の概要

2022 年度当初の研究計画では、遠藤隆吉研究を軸とし、おもな著作やその分類、その文献研究を中心に据えていた。だが、学園内活動が活性化するに伴って、まずは著作関連の整理のまえに、遠藤隆吉の哲学研究を軸に置き直した。著作・文献研究は新たに結成された総合研究所をベースにより体系的な研究の可能性が開かれることになったからである。

そこで、個人研究としては中心的課題を次のように再設計した。すなわち、遠藤隆吉の生々主義哲学の実践研究である。ここでは「生々」概念の了解とその実践の教育的実現の可能性を課題に据えた。遠藤隆吉の「生々」概念は単に文献的に理解することを主眼としていない。むしろその実践を打ち出した概念であり、だからこそ、本来的には「道場」として、生々修養の場が学園の教育実践の場として企図され、設けられていたのである。それゆえ、研究としては遠藤隆吉の生々主義哲学の概念と実践の総合的探究が必要である。そこで、遠藤隆吉の「生々主義哲学」の文献研究と実践探究の二柱を軸として個人研究の活動を推進した。

結果として、本年度は文献研究については研究会を開催し学生参加を促すには至らず、代わりに、実践探究として様々な学生たちの自己及び学園生活の創造性の活性化を軸としたプロジェクト開発の場を設計し、その企画運営にあたる準備を進めることができた。

主体性と創造性は「生々」概念の本質を成すが、まさしく、学園の建学精神を記す「生々示宇碑」にあるように、人間が自然とともにその流れに沿うように歩むか、それとも、自然に反しこれを破壊し自己利益のために消費するように歩むかを、主体的かつ創造的に「判断できる人間」となることが生々主義の眼目なのである。この判断主体こそが、「a reasonable creature」すなわち「理性的存在者」たる自己でなくてはならないのだ。遠藤隆吉の生々主義哲学の実践的本質はここにあるのである。おのれ自身すなわちあらゆる存在との関係性の中で、生々そのものの意味や理由を、相互に、あるいは自然とともに、問い、互いを活かし支え合う仕方で理想を希求し、課題と克服の可能性を探究し、生々を実践することのできる人間として立つこと。これが、生々主義哲学の実践者すなわち「治道家」の基本的資質となる。

そこで私は、新たに開設したプロジェクト実践開発の場の標語を、「Project as A Reasonable Creatures」と定め、その目標を、様々な自己がそれぞれと相互の生々発展に向かって協同し、様々な理想を実現することを目指す、とした。研究と社会実装のあいだにはタイムラグが存在するが、この活動は、研究と社会実装を同時に可能にすることに挑戦してゆく。22 年度はこうした考え方の素地を敷いた。以降は、この研究及び探究の企図や組織・運営等について継続的に研究し、推進してゆく。

以上

参考文献

遠藤隆吉・蛯名賢造編『生々主義哲学綱要』西田書店、1992 年

２．著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

なし

３．主な経費

研究活動にかかる記録やオンラインでの情報共有のためのノート PC を購入した。

４．その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

なし

（本文は 2 ページ以内にまとめること）